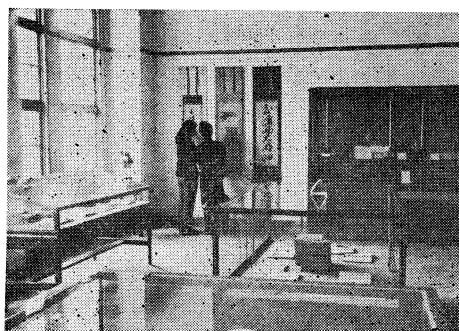


- Experientia ; Vol. 1—18 (1945—1962)
- 日本レダリー株式会社
Journal of Colloid Science ; Vol. 1—17 (1946—1962)
Journal of Pharmacology and Experimental Therapeutics ;
Vol. 116—136 (1956—1962)
 - 日本新薬株式会社
Liebig's Annalen der Chemie ; Bd. 357—628 (1907—1955)
 - その他：東大薬学部，京大薬友会，九大薬学部，日本油脂，武田薬工，新三菱重工，台糖フェイザー，三共KK，丸善書店，吉岡書房，U. S. エシアティック・カンパニー，金原書店，京大化学研究所，乙卯研究所，日本ブラッドバンク

北村季吟展開催 —読書週間始まる—

本年1月に新玉津島神社（下京区松原通丸丸南入玉津島町）から同神社宝物40点が本館に寄託されたので，これにちなんで，読書週間中の10月28日から3日間「北村季吟展」を開催した。陳列品は宝物中の季吟自筆「道の栄」「季吟日記」以下数点と，同神社保管中の宝物後水尾天皇宸筆玉津島大明神神号）以下数点のほか，館蔵の季吟著作刊本等を加えた。「道の栄」は同神社内北村季吟大人遺著刊行会からその第1集



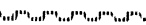
として37年9月に初めて出版された珍籍であり，「季吟日記」も第2集として，38年11月に出版されたものであるが，これは旧重要美術品の指定を受けていたものである。

これらの宝物を本館に寄託されることになったのは，稠密の巷を避けて保管に万全を期したいという文化財保護の意味と，いまひとつには，学術研究の上に貢献したいという神社所在町内の方々の発議によるものである。

季吟が，和歌・俳諧の巨匠であり，それ以上に古典文芸注釈の碩学であったことは改めていうを要しないが，季吟と新玉津島神社の関係について一言する必要があるかと思う。新玉津島神社の現在位置は鎌倉時代初期の著名な歌人五条三位藤原俊成（定家の父）の旧邸内の一部であって，俊成はここに和歌三神のひとつである紀州和歌浦の玉津島明神を勧請して崇敬したところである。「源氏物語湖月抄」，「枕草紙春曙抄」，「八代集抄」等数々の名著を既に世に送り，季吟としては最後の注釈書である「万葉集拾穂抄」の筆を起して間もない天和3年2月（1683）60才の時，人のすすめにより社司としてここに来住し，元禄2年に幕府に召されて江戸に移住するまでの6年間を，この神社に過したのである。

館内めぐり

図書の出生届け



受入掛

京大の図書館にある本はもちろん，どの学部，どの研究室にある本も，京大での生活を始めることに決定したら，必ず通らなければならないのがこの受入掛だ。京大とひとくちについても遠くは九州阿蘇の火山研究施設，北海道の釧路，白糠の演習林等のようにその名を冠した施設は，日本中に散在している。このような施設もふくめて，すべての京大

の図書は、この受入掛ではじめて京大生活のうぶ声をあげることになっている。それは京大の図書の管理方式が、全学一体の形をとっており、どの部局で購入された本も、どの研究所で寄贈を受けた本も、まず図書館の蔵書とされた上で、それぞれの任務に服するために散っていくからである。

ここで一応京大の図書に関する数的な統計を見ていただこう。明治30年に京大が創立されて以来、昭和39年4月までに受入れられた本は、和書 1,216,475 冊、洋書 1,052,256 冊、合計 2,268,731 冊となっている。これは、日本の他の図書館と比べると、国立国会図書館、東京大学に次いで多いということになる。昭和38年度中には 69,184 冊が受入れられた。これは1年を通じて、日曜日でも祭日でも毎日 200 冊の本が受入れられたことになる。

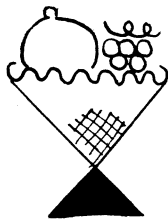
では、受入掛とはどんな仕事をしている掛であろうか。一冊の本がどういう操作を経て京大に籍をおくことになるのか、その流れに従ってみよう。本屋の店頭から運ばれてくる場合、外国の港から船にのって運ばれてくる場合、あるいは、会社の社史とか、都道府県の地方史のように、直接送られてくる場合というようにいろいろあるが、本は法律で定められた書類とともに各部局から図書館の受入掛へ運ばれてくる。そこで入籍の日と、入籍順の受入番号とがあたえられる。

そしてすべての本は朱肉のついた大きな蔵書印と、受入番号印をタイトルページの裏に捺される。こうしてはじめてただの本が京大の本に生れかわる。京大の蔵書印を捺された本は、その服すべき任地に従って同じ行き先の仲間とともにボテ箱につめこまれ、トラックの荷台に乗せられ、先生方や学生諸君の待っている学部、研究所へ送り出されるわけである。

こう書いてくると、そんなに大した仕事ではないかのように感じられるだろうが、なかなかどうして、受入掛は、会計検査の対象にも含まれるから、司書の多い図書館の中で、会計掛と同じようにソロバンや計算機が必要であるし、それに加えて、図書を見る司書としての目も要求される。さらにトラックの上に乗って配達もするので、筋肉も太くなければつとまらない。昔、受入掛にいた人で、蔵書印の捺印に情熱をこめて、実に美しく立派な仕事をされた人があった。いつも羽織はかまのいでたちで仕事にのぞみ上下のつり合い、左右の間隔、印肉の濃淡と、一分の隙もない蔵書印であったという。今でも、その人の仕事は書庫に並ぶ多くの本のタイトルページをかざっている。

京大の中で本を読まれる方は、どの本にも、受入掛員の汗が流れていることを感じとっていただきたいものである。

—あ と が き—



文化の月に第2号をお届けできることを大変うれしく思います。創刊号に見たほどの生みの苦労はなかったというものの、教官、職員、学生諸君と広範囲にわたる読者諸兄姉を対象としているだけに、編集員一同懸命に頑張っております。何分にも発行部数に制限がありますので、お読みになった館報は回覧していただき、投稿やご批判をいただければ編集員としては何よりの喜びです。